



No. 123

ティー・ブレイク

Tea Break

プラチナチケット

皆さんは、従来からの知識と新しいアイデアとで、どちらが問題解決に役立つと思っているのでしょうか。これについては、比較的多くの方々が、「それは、新しいアイデアに決まっている」と思われたかもしれません。そしてその考えは、いかにも発明という新たな発想を扱う弁理士らしいとも言えるでしょう。

けれども、皆さんは一体、何年にわたって“学校教育”というものを受けてきたのでしょうか。基本的に学校というものは、「従来からの知識や知恵」というものを教え込む場です。

そして、“独創”などは、学校では決して教えてくれないわけですから、ユニークな発想で勝負して行こうなどと思ったのであれば、学校になど行っている場合ではありません。即刻、退学すべきです。逆に、本当に独創的な人というのは、学校になど居ることはできません。現に、例えば独創的でユニークな発想で偉大なる功績を遺した本田宗一郎などは尋常小学校しか出ていないわけで、学校に行っていた期間が著しく短かったわけです。これらは、考えてみれば、当然のことなのです。

それにもかかわらず、独創で偉人となった人に対して「小学校しか出ていない人が…」と評価してしまうのは、学校で刷り込まれた価値観に毒されているからかもしれません。そういった人は、なにか問題にぶち当たったときには、本をめくったり、インターネットで検索をしたりして、必死に答えを探すことになるわけです。

そしてこれは、同じ文献検索をするにしても、新しい発想をするための肥やしとして従来からの知識を勉強するのは、天地ほどの差があります。

ところで、金（ゴールド）というのはかなり昔から価値あるものだったようです。けれども、白金が価値あるものとして認識されたのは、そんなに昔のことではありません。今となっては信じられないことですが、金を採掘するときと一緒に出てきてしまう、分離しにくい邪魔者として扱われていたこともあったようです。

こうした金と白金の関係は、ちょうど従来技術と新規な発明の関係に似ているところがあります。これらは互いに隣り合わせで、一緒に掘り出されてきます。そして、意外に分離しにくいものなのです。

けれども、それがきちんと精錬されるかのごとくに分離できたときの喜びは一入です。もちろん、たまにはあえて合金のようなものを作ることはあり、そのできばえに一種の喜びのようなものを感じることもあるのですが、それはそれとして、やはりきちんと精錬ができたときに発する純な光の美しさは何とも言えないものがあるものです。

知財重視の世の中になって色々と言われてはいますが、そもそも弁理士という仕事は、そういった面白さがあるからこそ続けられるのだと、そう思います。

(正)